

Prescriptive Attitudes towards Belgicism: Prescriptivism as a Form of Linguistic Insecurity

Belgium has produced a lot of remarkable grammarians: Maurice Grevisse, Joseph Hanse, André Goosse, Albert Doppagne, and Daniel Blampain... They have written a large number of books from a prescriptive perspective, and played a major role in establishing the concept of “Standard French”, or “French of France” (hereinafter FF).

In Belgium, 4 million people speak a variety of “French”, which is different from FF on a number of levels. This speech form is usually known as “French of Belgium” or “belgicism”. In this context, Belgian grammarians have actively involved themselves in preserving FF and establishing its authority. Why have they persisted in their adherence to FF and at the same time brought FB (their own language) into an inferior position?

The notion of “linguistic insecurity” which is regarded as typically being felt by the *petits bourgeois* would enable us to comprehend this situation. Linguistic insecurity is a longing for linguistic legitimacy, more specifically it is an intense desire to speak “correct” language.

It is commonly accepted that the grammarian belongs to the most prestigious class in the “language market”. The Belgian grammarians, however, are in a different position. That is, they are neither French nor a member of the general public; they fall in the middle category of the construct “French – Belgian grammarian – Belgian populace”. It is this very same intermediate position that invokes the grammarians’ insecurity.

Evidently, there is no doubt that, as it has heretofore been pointed out, the prescriptive tradition of the grammarians is a factor in the instigation of Belgian populace’s linguistic insecurity. But, that tradition is originally caused by their own linguistic insecurity. The prescriptive tradition of the Belgian grammarians is not merely a factor that inflames the populace’s own linguistic insecurity, but also a form of linguistic insecurity that they themselves possess.

Finally, in late years, attitudes towards belgicism have shifted from “denial” to “affirmation”. By locating Belgian grammarian in an intermediate position and considering the prescriptivism as a form of linguistic insecurity, we affirm that there is, behind the attitudes towards Belgicism, an linguistic insecurity that do not change according to the changing times.

1 はじめに

本稿の目的は、ベルギー人文法家の規範主義的伝統を「言語的不安」の観点から捉え、ベルジシズム排斥もそれを背景として行われ、さらに近年見られるベルジシズム肯定の動きの背後にも根強く残っていることを示すことにある。

時に「文法家の土壌」(Francard, 1993:62)と呼ばれるほどに、ベルギーはこれまで多くの文法家を輩出してきた。今なお「最良のフランス語文法書」(Mercier, 2000:23)の一つとして評価を得ている『ボン・ユザージュ』を記した Maurice Grevisse や『新フランス語難解辞典』の Joseph Hanse をはじめ、André Goosse や Albert Doppagne など多くの名が思い浮かぶ。彼らは「規範主義」的な立場で多くの著作を残し、「標準フランス語」つまりは「フランスのフランス語」(以下 FF)の確立に多大な貢献を果たしてきた(Holtus, 1992)。

これら Grevisse や Hanse の文法書が「正しい」フランス語の伝道を意図したものであるならば、その逆に「正しくない」フランス語を取り除くことを意図した書物も繰り返し出版されてきた。そこで排斥の対象となったのは、文法家自らのことばでもある「ベルギーのフランス語」(ベルジシズム)である。

何故、彼らは自らのことばを捨ててまで FF の確立に手を貸すのか。デンマーク人の Otto Jespersen による英語の文法や、英語コーパス言語学における北欧の研究者の主導的役割などが示すように、対象言語の典型的な母語話者の中にはいない研究者が、その言語の研究において重要な貢献を果たすことは珍しいことではない。だが、彼らが研究対象の言語を一方的に顕揚し、自らのことばを排斥することはなかったであろうし、少なくとも、それを人々に押し付けることはなかったはずである。

言語学者と一般大衆¹の間には、本質的な見解の相違が存在するものとされる(Milroy & Milroy, 1985/1988:5-11/18-26)。「正統にして適法な言語」の形成過程は「文法家や教授連によって設定され」と説明されるように(Bourdieu, 1982/1993:27/37-8)、一般的に文法家は言語市場において特権的地位にあるものと考えられている。

これまでの「言語的不安」の研究では、不安の感情の担い手として考察の対象に置かれてきたのは、そのような文法家ではなく一般大衆であった。そこでは、ベルギー人の文法

¹ 本稿では、「一般大衆」という用語は「文法家・言語研究者以外の人々」の意味で用いる。

家は教育者などと共に、むしろ一般大衆の「言語的不安」の感情を掻き立てる存在として描かれてきた (Francard, 1996:99)。

さらに、特にフランス語圏の研究者によって発展させられた「言語的不安」の概念は、パリを中心とする「中心 - 周縁」という二分法によって論じられてきた (Francard, 1993-1994)。このような構図では、ベルギー人文法家は考慮から外されるか、または単に「周縁」に収斂され、一般大衆とは異なる独自の立場や役割を理解することが困難となる。

そこで本稿では、ベルギー人文法家をそのような「中心」と「周縁」の間に新たに位置付けることで、ベルギー人文法家の規範主義が一般大衆の「言語的不安」を生み出す要因であると同時に、その規範主義自体が文法家が抱える「言語的不安」の発露の一形態であることを示す。そして、自らのことばを排斥することを人々に押し付けるという行為も同様に文法家の「言語的不安」を背景として行われてきたことを示す。

2 ベルジシズムとその排斥の歴史

2.1 ベルジシズムとは？

一般的に、「フランスのフランス語とは区別されるベルギーのフランス語の特徴」(Hanse et al., 1971:30)と定義される「ベルジシズム (belgicisme)²」だが、おそらくその最もよく知られた例は、数字の表現法であろう。例えば、「70」はフランスのフランス語では « soixante-dix », つまり「60+10」と表現するのに対し、ベルギーでは « septante » と表現される。また、「90」に関して、« quatre-vingt-dix » (4×20+10) に対して、« nonante » というように異なる方法で表現される³。

その他にも、例えば商店で代金を渡す際に « Voilà » ではなく « S'il vous plaît » を用いることや、「車が動かない」を « Cette voiture ne sait pas démarrer » (FFでは« ... ne peut pas ...)と表現するようないわゆる「助動詞 savoir の pouvoir への侵食」の現象など、様々な語彙的な特徴が存在する。さらには、発音上の違い(4つの鼻母音の維持:« brin »と« brun »の区別など)や、形態・統語のレベルでの差異(品質形容詞の前置の傾向:« sale linge »

² 現在、この用語のもつ否定的なコンnotationを避けるために « belgisme » という用語を使用することを主張する研究者もいるが (Moreau, 1997 など) 今のところ少数であり本稿では従来慣例に従う。

³ 実際には、この用法はかつてFFにおいても同様に使用されていたアルカイックな用法 (archaïsme) であり、フランスにおいても「南仏においては第二次世界大戦中にはまだ使用されていた」(Lebouc, 1998:14)。また、現在でもスイスやカナダなどのフランス語においても見られる。なお、「septante」は現行のベルギー憲法において、「... le sénat se compose de septante et un sénateurs ...」(第67条)と使用されている。

など)も存在する⁴。

そもそも二つの形態の間には構造的・機能的な優劣は存在しない。しかしながら、ベルジシズムの大半は、しばしば学校教育において矯正の対象となり、また公的な場面では通常使用が避けられるべきとされてきた。

2.2 規範としてのボン・ユザージュ

さて、そのようなフランス語の地域的な差異に関して、中央パリのフランス語から逸脱したと思われることばが国家(フランス)の周縁地域で使用されていることは、すでに18世紀後半から人々の意識にのぼるものであった。20世紀に入ると、Auguste Brunをその初期として、言語学的な関心の下で記述されるようになった。

とは言え、当時 Albert Dauzat が「ある特定の地域において、とりわけあまり教養のない人々によって話されているフランス語」(Dauzat, 1967:265、強調は筆者)と述べているように、それはあくまで「劣った」フランス語でしかなく、「結局のところパトワ」(Charles-Brun, 1911:155)としての認識をこえるものではなかった。

このような「地域フランス語」への否定的な眼差しは、Brun(1946:137, 140-1)をもってして、「言語的私生児」、「方言的なことばの垂種」、「寄生虫」などと表現された⁵。それらは常に参照される「規範」である「正しいフランス語」、または「ボン・ユザージュ(bon usage)」に対して、副次的な地位しか与えられなかった。

Grevisseの文法書のタイトルでもある「ボン・ユザージュ」は文字通り、フランス語を話す者が実践すべき「良い慣用」である。Claude Favre de Vaugelas(1585-1650)が『フランス語覚書』(1646)の序論において行った定義、「宮廷の最も健全な部分の話し方であり、当代の作家たちの最も健全な部分の書き方に一致するもの」に端を発し、フランスの言語政策の伝統を長きにわたり支えてきた。ベルジシズムに対する否定的眼差しは、まさにこの「ボン・ユザージュ」との対比によって行われてきた。

2.3 ベルギー人が犯す「誤り」としてのベルジシズム

ベルジシズムを「正しいフランス語からの逸脱」と捉え、それらを取り除こうとする働

⁴ これらの差異はそれだけで一つの言語体系をなすものではなく、ベルジシズムはベルギーという空間で見られる「フランス語」の単なる諸特徴でしかない。

⁵ それぞれ、「bâtards linguistiques」、「sous-produits des parlers dialectaux」、「parasites」。

きかけは、ベルギーの歴史の中で長きにわたり繰り返し行われてきた。19世紀以来、このような目的をもった「ベルジシズムの排斥の書」が数多く出版されてきた。

19世紀の初頭には、Antoine-Fidèle Poyartの手によるとされる『フランドリシズム・ワロニシズム・フランス語における不適切な表現』が出版された⁶。副題が示すように、ここではベルジシズムは単なる「フランス語を話すまたは書く際にベルギー人が頻繁に犯す誤り」という認識でしかつた。

独立後の1857年、『ベルジシズムまたはベルギー内で頻繁に見られることばや発音の悪習』の中で、Joseph Benoîtは「できることならば、[ベルジシズムという]悪と戦い、それらを根絶しよう」(Massion, 1987:77より)と述べている。彼にとって、ベルジシズムとは「ベルギーにおいてフランス語に導入され、言わばそこで定住・帰化した破格用法、実際の語義からかけ離れた語、不正確な言い回し」(Piron, 1985:371より)であった。

このような態度は、世紀が変わっても変化することはなかった。G.-O. d'Harvé(1923:332)は毒麦の比喻をかりて以下のように述べている。

本書で行うことは、フランス語の種がベルギー領土内で生み出す毒麦(*ivraie*)を明示し、[人々が]それを認めることができるように奇形の植物を植物標本の中に置くことである。そうすることで、フランス語を話す友人たち[ベルギー人]がその言語の庭から雑草を取り除き、健全な植物を得ることができるようになるのである

当代の人々にとって、ベルジシズムとは相変わらず「誤り」であり、「ベルギーのことばに固有の改悪(*altération*)」(Paquot & Wilmotte, 1933:430)であった。それが「誤り」であるが故に、ベルギー人たちをそのような「ベルギーのことば(*parler belge*)」がもつ諸特徴から解放する」(*ibid.*, 423)必要があると考えられたのである。

ここでは、「*Corrigeons-nous!*」「訂正しましょう!」や「*Ne dites pas A mais (dites) B*」「AではなくBと言いましょう」、*« Parlons bien [mieux]! »*「上手に話しましょう!」という定形的な表現が繰り返し用いられ、熱心に「正しい」フランス語への啓蒙が行われた。

このような動きは20世紀の後半に至り再び激しさを増すこととなる。その契機となったのが、Joseph Hanse や Albert Doppagne らが1971年に出版した『ベルジシズム狩り(*Chasse aux belgicisms*)』である。この書でも、従来のベルジシズムに対する態度は受け継がれて

⁶ 初版が刊行されたのは、現在のベルギーが1830年に独立を果たす以前の1806年である。また、1811年の第2版で「ベルジシズム」という用語が使用されたのが、この用語の初出とされる(Piron, 1985:371)。

いた。ベルジシズムはイタリック体で表記され、ゴシック体で記される「良い形態 (bonne forme)」(即ち FF) と対置される形で提示された⁷。ベルジシズムは相変わらず「非難されるべき語彙や表現」(Hanse *et al.*, 1971:18) という認識を超えるものではなかった⁸。

3 言語的不安

3.1 概念の発展

言語に起因する劣等的感情を指し示す「言語的不安 (insécurité linguistique)」という概念は、William Labov (1966; 1972) の社会階層による言語の変異に関する研究に端を発する。その後、Pierre Bourdieu (1982/1993:38/48) も、(この用語自体に言及はしていないが) 同様の現象に関して、以下のように述べている。

訂正を受け入れざるを得ぬ、劣位の = 支配された dominés 人々は、何とか正しくしていこうと躍起になって、意識的にせよ無意識的にせよ、自分たちの発音や(あらゆる婉曲形式を含めた)自分たちの使用語彙、さらには自分たちの統辞法のなかで、烙印を押された面を屈服させる [= 訂正に付す] わけである。

要するに、言語的不安とは言語的正統性 (légitimité linguistique) の希求、すなわち「正しい」言語を話したい願望であるとされる。そのような感情は、絶え間ない訂正(時として過剰訂正 (hypercorrection) ともなる) の姿勢により顕在化される。標準語(公的言語)の自然な顧客層である支配階級による「象徴的支配」において、被支配者階級の人々は支配者側の言語の正統性に対して異議を唱えることをせず、もっぱら自らを同化させることを試みる点で「ある種の共犯性を想定するもの」(*ibid.*, 36/45-6) である。

後に、特にフランス語圏の研究者によって、この概念は発展させられた。1978年、Nicole Gueunier らは『規範の前のフランス人 (Les Français devant la norme)』において、Labov が提起したこの概念を、社会階層・階級間の現象から地理的なものへと拡大した。最も「美しい」フランス語が話されるとされるツールでは、一般的に言語的に安定した感情が見られるのに対して、周辺部であるリールやリモージュ、レユニオンなどでは、中央のフラ

⁷ 例えば、« *Il ne sait pas lire, il fait trop sombre* » に対して、« *Il ne peut pas lire, il fait trop sombre* »。

⁸ 著者の一人である Albert Doppagne (2002:4-5) の回想によると、当時この書物に対して少なからず否定的な反響もあったようではあるが、大勢では好意的に受け入れられたようである。発売以後2年間で、3万4000部が売れたとされる (Francard, 1993:62) この数字はベルギーの市場規模から考えて非常に大きなものである。その大きな反響を受け、1974年には続編として『新ベルジシズム狩り』(Hanse *et al.*, 1974) が刊行された。

ンス語に対して言語的不安の感情が観察されることが示された。さらに、近年の研究において (Francard, 1993-1994 など) フランス共和国以外のフランス語話者にも同様の感情が見られることが指摘されている。

3.2 ベルギー人の言語的劣等感

FF に対するベルギー人の劣等的感情は以前から指摘されてきた。例えば、自らのことばに関して「貧弱さと不適切さ、それが私たちの語彙に本質的に内在する欠点である」と述べ、一方で「フランス人は、それがほとんど教育のない者であっても、[ベルギー人よりも]より正確でより豊かな言語を話す」(Paquot & Wilmotte, 1933:423) というような悲観的・従属的態度は、しばしばベルギー人のもつ一般的感情として紹介されてきた。

さらに、Georges Lebouc (1998:13) は「ベルギー人はフランス人の饒舌さ、政治家たちの見事な演説、露天商たちの口達者ぶりに感嘆する。そのような饒舌さは複数の言語が使用されている国でみられるような躊躇というものからはかけ離れたものである」と述べているが、このような状況もまた同様にベルギー人の言語的劣等感を示す好例である。

劣等感はその極みとなれば、人は「無口」となる。優れていると考える FF の話者と対峙すると、自らのことばを恥と感じ、ただただ相手の雄弁さに圧倒される。つまり、そのような場面に置かれると、人は「言葉が見つからない」や「もうどうしようもない」という、「あたかも突如自分自身の言語を奪われてしまったかのような有様となる」(Bourdieu, 1982/1993:38/48) のである。

さらには、ベルギー人の FF への強い憧憬を端的に表現する «fransquillon» という語の存在や⁹、近年なお、「私が «nonante» とする時はいつも、口の中にジャガイモがはいつているような気がする」¹⁰といった心情が相変わらず新聞紙上で吐露されることなど、FF への憧憬と自らのことばの軽視というベルギー人の言語的劣等感は、根深く激しい。

4 言語的不安と規範主義

4.1 言語的不安と中間的位置

それでは、このようなベルギー人がもつとされる言語的不安の感情と、ベルギー人文法

⁹ この用語はワロン語の *franskiion* から派生した語であり、それ自体がベルジシズムである。軽蔑的なコノテーションをもつこの用語は、「(パリの)中央フランス語の慣用のアクセントや表現に愛着を感じ、それらを取り入れてフランス語を話す人」(*Robert*) という意味をもつ。

¹⁰ *Le Soir*, 21 octobre 1993

家たちの規範主義的伝統の間には関係があるのか。1.で述べたように、一般的に文法家は、「正統にして適法な言語」を形成する側にあり、言語市場において威信ある層であるとされている。そうであるならば、ベルギー人の文法家と言語的不安とは相容れないものとなり、彼らの規範主義的伝統もまたそれとは一切関係ないということになる。

しかしながら、言語的不安の現象を、そもそも Labov(1966; 1972)や Bourdieu(1982/1993)が指摘しているような、「低中産階級 (lower-middle-class)」(Bourdieu では「プチ・ブルジョワ層 (petite bourgeoisie)」)において殊に顕著に見られるとする見解に立ち戻るならば、また別の見方が可能となる¹¹。

民衆階級の人々は、そもそも社会的上昇の機会が限定されており、また自分たちのことを「敢えて [他人に] 押し付ける力もなく、借り物の言語の調子っぱずれのかたちに頼るか、さもなければ棄権か沈黙へと逃避する」。一方で、「支配者階層 = 階級の構成員ならば、自分たちの言語的ハビトゥスが (…) 現に実現されている規範」と一致する。故に、両カテゴリの人々は強い不安を感じることはない。「プチ・ブルジョワたちは (…) 民衆階層 = 階級とも支配階層 = 階級とも区別される」(以上 Bourdieu, 1982/1993:86/98-9) のであり、まさにその「中間的な位置」が、より激しい言語的不安の要因となる。

当初「階級・階層」間の問題として提起された言語不安の概念であるが、後にフランス語圏で発展する過程で、「中心 - 周縁」というむしろ「地理」的な問題として論じられることとなった。そこで以下、一旦元来の意味に立ち返り、「フランス人」と「ベルギー人一般大衆」を両極とする「言語空間」を考え、その中間に「ベルギー人文法家」を位置付ける。その後、ベルギー人文法家の規範主義的伝統を言語不安の概念で捉えてみよう。

4.2 ベルギー人文法家の言語的不安

4.2.1 常に参照されるフランス語

まずは、ベルギー人文法家の FF に対する態度を見ていくことで、彼らがフランス人 (のフランス語) とは区別される位置にあることを確認しよう。そもそも、ベルギーにおけるフランス語研究がフランスにおけるそれとは異なる点から出発し、独自の発展を遂げてきたという事実が存在する (Trousson & Berré, 1997)。

ベルギー人文法家によってしばしば「中央の (central)」や「標準の (standard)」といっ

¹¹ 「低中産階級の話し手が言語的不安に向かう最も強い傾向を示す」(Labov, 1972:117)。Labov (1972) の仏語訳では、« lower-middle-class » にそのまま« petite bourgeoisie » があてられている。

た修飾語を伴い用いられるフランス語とは、明らかに「よいフランス語 (bon français)」であり、「ボン・ユザージュ」(Paquot & Wilmotte, 1933:429)であるフランス (パリの) フランス語、即ちフランス人のフランス語である。このような「明瞭で正確、正しくて簡潔な言語」(Doppagne, 1979:16) は、ベルギー人文法家にとって常に参照すべきものであり、最終的な到達点として設定されるものである。

また、Hanse *et al.* (1971、強調は筆者) における以下のような発言からは、FFを「正しくて良いもの」だとする態度が見られるのと同時に、自らをフランス人から決定的に区別されるものとして捉えている様子がうかがえる。

私達には共通語やボン・ユザージュから離れないようにする義務がある (p. 8)

私達は savoir という動詞に正しい言語にはない意味を与えている (p. 135)

ここでの「私達 (nous)」は、ベルギー人 (文法家および一般大衆) を指し示し、「正しくて良い」フランス語を話すフランス人とは区別されている。ベルギー人文法家はフランス人とは異なる範疇に属しているものと考えることが可能である。

4.2.2 ことばの専門家としての文法家：職能と使命

そもそも、言語的不安の感情は、「正統とされる用法」と「自分自身の用法 (own use)」の間に差異 (Bourdieu では、「承知 (reconnaissance)」と「知識 (connaissance)」の間の隔たり) が実質的に存在するという状況だけでは生じ得ない。言語使用者がその差異を意識することによって、初めて「正統とされる用法」に対する不安感が姿を見せる。つまり、自らの言語実践と正統とされるものとの間に、そのようなズレを (それが無知であれ慢心であれ、何らかの理由で) 明確に認識できなければ、強い不安感に苛まれることはない。

この点において、ベルギー人の文法家たちはまさしくことばの専門家であり、そうであるがために、(語の語源的知識、音韻・統語的知識など様々な言語学的知見によって) 一般大衆と比較して、より一層強く自らのフランス語 (ベルジスム) と FF の間の差異を認識することが可能な立場にある。ことばの専門家の中にも、また専門家であるからこそその言語的不安が存在する。

また、ベルギー人文法家と一般大衆とを分けて考えなければならないもう一つの理由がある。上述の違いが文法家の職能に関するものであるとするならば、もう一方はことばの専門家としての文法家の使命に関する問題である。一般人とは異なる精度でより詳細にズ

しを認識できる文法家は、それを一般大衆に伝えることをその使命とする。

例えば、「ベルギー人を方言の影響から (...) 解放する」(Paquot & Wilmotte, 1933:423) や、「同郷の人々 [ベルギー人] に、普遍的フランス語の中に溶け込み、自らをよりよく表現することを奨励し、またそれを手助けする」(Hanse *et al.*, 1971:9) という目標が繰り返して表明されてきた。一般大衆を「解放」し、「手助け」することが使命であることを、彼ら文法家は認識しているのである。このような点から、ベルギー人文法家とベルギー人一般大衆は、異なる範疇に属するものと考えることが可能である。

4.2.3 中間的位置のベルギー人文法家

以上見てきたように、ベルギー人文法家はフランス人と区別されると同時に、ことばの専門家である点で、ベルギー人一般大衆からも区別される。このように考えると、ベルギーの文法家を、「フランス人 - ベルギー人文法家 - ベルギー人一般大衆」という3つの構成要素からなる「言語空間」で中間的位置に置くことが可能となる。

殊に中間層に属する者において最も顕著に見られるという言語的不安の性質からして、ベルギー人文法家は決して言語的不安とは無縁の存在ではない。むしろ、ベルギー人一般大衆と比較して、より激しい言語的不安の感情に苛まれているとも言える。FF に対する言語的不安にかられた文法家たちが自らの社会的上昇、つまりはフランスにおいても文法家として認められるために「正統な言語」(FF) を受け入れるのである。

また同時に、ことばの専門家としての文法家のもつ使命によって、彼らの不安は一般大衆に伝えられる。自らのことばに対する過小評価は、文法家個人の枠を超え、「ベルジシスム排斥の書」となり大衆に元に届けられる。これらは善意として行われるものではあるが、無論、それらは一般大衆の言語的不安は掻き立てる結果をもたらすのである。

ベルギー人の文法家の規範主義的伝統は、言語的不安の発露の一形態であると考えることが可能である。確かに、文法家たちの規範主義的伝統が、ベルギー一般大衆の言語的不安の要因であることには違いないが、その源には文法家の言語的不安が存在する。

5 近年のベルジシスム肯定の動きの背後に残る言語的不安

5.1 規範的態度の否定：規範主義から記述主義へ

最後に、近年のベルジシスム擁護論と言語的不安の関係についてごく簡単に見ておこう。近年のベルジシスムに関する言説に見られる特徴は、その規範的態度の明確な否定である。

ベルジシズム辞書の隆盛の先駆けともいえる François Massion の『ベルジシズム辞典』では、その冒頭部分で「我々は明確に規範的な観点を完全に破棄する」(Massion, 1987:3)と宣言されている。その背景には、ベルジシズムを「少なくとも価値体系の面では FF と同じレベルにおくような一つの实体 (*entité*) として扱い」、ベルジシズムを「FF から解放する」という意図があった (*ibid.*, 58-9)。

また、このような「規範的態度の否定」は、当然の帰結として「記述主義の強調」という形をとる。このような「規範主義」から「記述主義」への移行の宣言も、近年のベルジシズムに対する特徴的な態度の一つである。

例えば、Willy Bal ら錚々たる文法家たち (著者の中には Doppagne や Hanse、Goosse らの名も含まれる) の手による『ベルジシズム：ベルギーにおけるフランス語の語彙的特徴の目録』では、「我々の意図はもっぱら記述的なものである」とし、ベルギー特有の特徴を記述するに際して「いかなる判断も行わない」ことを宣言している (Bal *et al.*, 1994:5)¹²。

ある語彙 (または統語・形態的諸特徴) に対して主観的な価値判断を一切行わないとする「規範主義の否定」と「記述主義の強調」は、近年にベルジシズムに対する研究において、ほぼ例外なく見られる態度である。

5.2 ベルジシズム肯定の裏の言語的不安

規範主義否定の流れの裏で、フランスへの言語的従属の姿勢が、今日でもなおいくつかの言説から読み取れる。先に挙げた Bal *et al.* (1994:5) では、その編集の方針として「誰も [ベルジシズムの目録へ加えることに対して] 批判しようとは思わないような *bourgmestre* のような多くの公的な名称」¹³と共に「ロマンス語やフランデレン語の方言からの借用語のような正しくないと思われるような用法も同様に書き留める」とし、規範主義の破棄に伴い単語の主観的な価値判断を避ける姿勢を明確に打ち出している。

しかしながら、続けて「その他の地域 (スイスやケベックなど) でもその語や用法が見られるかを提示することは断念した」が、「フランスに関しては例外とした」と述べている。つまり、FF でも同様にその用法が観察されるならば「フランスにおいても同様に知られて

¹² Massion (1987:3) でも、「本書の第一の目的は、単語の価値に関していかなる主観的な価値判断も避け、ベルギーのフランス語を特徴付けているものを記述すること」と、同様の見解が示されている。

¹³ フランデレン語の « *burgemeester* » から派生した語で、FF の « *maire* » 「市町村の首長」に対応する。ベルギーでは公的な用語として使用され行政文章の中でも散見される。また、« *maieur* » や « *mayeur* » もよりくだけた場面で用いられる。

いる」と表記するということである。この文脈においては、如何なる理由でスイスやケベックに関する情報が省略され、フランスについての情報のみが提供されるのかについては触れられてはいないが、FFを中心とする構造が相変わらず保持されていると指摘することは可能だろう。つまり、そこには「規範」として常に参照されるフランス(のフランス語)に対する言語的従属の感情を読み取ることができる。

同様の感情は、septante「70」を例に「もしブルターニュで septante と書いて小切手を振り出すならば、拒否される危険性がある」との忠告するような態度の中にも見られるだろう¹⁴。両国のフランス語が同等のものであれば、本来ならば双方が互いの差異を意識することで十全な意思伝達を図るべきものであるはずだが、ここではベルギー人へのみ、つまりベルジシズムを利用する者に対してのみ、配慮が求められている。

このような常に FF を参照し、また差異に対してはベルギー人へのみに配慮を求める「フランスへの言語的従属」は言語的不安の一つの側面である。規範主義を拒否し、純粹にベルジシズムを記述しようとする近年の動きにおいて、その背後に相変わらず言語的不安の感情が存在することを指摘することが可能である。

6 おわりに

標準フランス語の文法書やベルジシズム排斥の書に見られるベルギー人文法家の規範主義は、彼らが抱える言語的不安の発露の一形態と捉えることができる。通常、文法家はそのような感情とは無縁な地位にあると考えられるが、実際には文法家の中にも、また文法家であるからこそその言語的不安が存在する。

自らのことば(ベルジシズム)を排除し、進んで FF の確立に大きな役割を果たしてきたベルギーの状況は、ベルギー人の文法家の置かれる独自の位置を考えることで説明できる。つまり、フランス人ではなく、一般大衆でもないまさにその中間的位置によって、言語的不安が掻き立てられるのである。

3つの構成要素からなる「フランス人 - ベルギー人文法家 - ベルギー人一般大衆」という構図を考え、ベルギー人文法家を「フランス人」と区別することによって、ベルギーにおけるフランス語研究がそもそもフランスにおけるそれとは異なる点から出発し、独自の発展を遂げてきた事実についても同様に、説明を与えることが可能となるだろう。

¹⁴ Mercier, J. (2003) 'Monsieur Dico', *La Libre*, 25/08/2003.

また、最後に簡単に触れることしか出来なかったが、近年ベルジシズムに対する態度がかつての「否定」から「肯定」へ変化している。ベルギー人文法家を中間層に置き、かつての規範主義もその「言語的不安」の一つの発露と捉えることにより、その時代の大きな変遷にもかかわらず、ベルジシズムに対する眼差しの背後には、時代を通して変化しない言語的不安が存在していることを理解することが可能となる。

主要参考文献

- Bal, W., Doppagne, A. *et al.* (1994) *Belgicisms : inventaire des particularités lexicales du français en Belgique*, Duculot.
- Bourdieu, P. (1982) *Ce que parler veut dire : l'économie des échanges linguistiques*, Fayard. (稲賀繁美訳 (1993) 『話すということ : 言語的交換のエコノミー』藤原書店)
- Brun, A. (1946) *Parlers régionaux : France dialectale et unité française*, Didier.
- Charles-Brun, J. (1911) *Le régionalisme*, Bloud.
- Dauzat, A. (1967) *Tableau de la langue française : origine, évolution, structure actuelle*, Payot.
- Doppagne, A. (1979) *Belgicisms de bon aloi*, Office du Bon Langage.
- Doppagne, A. (2002) 'Le français en Belgique dans la seconde moitié du XXe siècle (note personnelle)', in Wakely, R. (éd.) *Les Belges : enregistreurs de tous les usages*, The University of Edinburgh.
- Francard, M. (éd.) (1993-1994), *L'insécurité linguistique dans la Communauté francophone périphérique*, CILL 19(3-4); 20(1-2).
- Francard, M. (1996) 'Le provincialisme linguistique des francophones de Belgique', in Bavoux, C. (éd.) *Français régionaux et insécurité linguistique*, Éditions L'Harmattan, pp. 93-102.
- Francard, M. (1997) 'Insécurité linguistique', in Moreau, M.-L. (éd.) *Sociolinguistique : Concepts de base*, Mardaga, pp. 170-6.
- Goosse, A. (1977) 'Qu'est-ce qu'un belgicisme ?', *Le bulletin de l'Académie Royale de Langue et Littérature française*, 55, pp. 345-67.
- Grevisse, M. (1936) *Le Bon usage*, Duculot.
- Gueunier, N., Genouvrier, E. et Khomsi, A. (1978) *Les français devant la norme*, H. Champion.

- Hanse, J. (1983/2000) *Nouveau dictionnaire des difficultés du français moderne*, Duculot.
- Hanse, J., Doppagne, A. et Bourgeois-Gielen, H. (1971) *Chasse au belgicismes*, Office du Bon Langage.
- Hanse, J., Doppagne, A. et Bourgeois-Gielen, H. (1974) *Nouvelle chasse au belgicismes*, Office du Bon Langage.
- d'Harvé, G.-O. (1923) *Parlons bien ! : recherches et trouvailles lexicologiques*, Office de Publicité.
- Holtus, G. (1992) 'Der Beitrag der belgischen Sprachwissenschaft zur Normierung des Französischen', in Dahmen, W. (Hrsg.) *Germanisch und Romanisch in Belgien und Luxemburg*, Gunter Narr, pp. 46-63.
- Labov, W. (1966) *The Social Stratification of English in New York City*, Center of Applied Linguistics.
- Labov, W. (1972) *Sociolinguistic Patterns*, Blackwell.
- Lebouc, G. (1998) *Le belge dans tous ses états : dictionnaire de belgicismes grammaire et prononciation*, Éditions Bonneton.
- Massion, F. (1987) *Dictionnaire de belgicismes*, Verlag Peter Lang. tom I,II.
- Mercier, J. (2000) *Le français tel qu'il se parle en Belgique*, La Renaissance du Livre.
- Milroy, J. and Milroy, L. (1985) *Authority in Language: Investigating Language Prescription and Standardisation*, Routledge. (青木克憲訳(1988)『ことばの権力：規範主義と標準語についての研究』南雲堂)
- Moreau, M.-L. (1997) 'Le bon français de Belgique : D'un divorce entre norme et discours sur la norme', in Blampain, D., Goosse, A. et al. (éd.) *Le français en Belgique*, Duculot, pp. 391-9.
- Paquot, M. et Wilmotte, M. (1933) 'Nos langues nationales : Le français', *Encyclopédie belge*, pp. 421-34.
- Piron, M. (1985) 'Le français en Belgique', in Gérald, A. et Robert, M. (dir.) *Histoire de la langue française 1880-1914*, CNRS, pp. 369-79.
- Trousson, M. et Berré, M. (1997) 'La tradition des grammairiens belges', in Blampain, D., Goosse, A. et al. (éd.) *Le français en Belgique*, Duculot, pp. 363-338.